

令和3年11月25日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：斎藤、手嶋、今野、柏瀬

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより

169号

11月の月例会について

11月の月例会には、杉村楚人冠記念館学芸員の高木さんより10月16日から開催されている企画展「禅」が結んだ人びと 釈宗演と楚人冠の周辺」について、展示解説がありました。

「禅」が結んだ人びと 釈宗演と楚人冠の周辺

○釈宗演（1860-1919）とは

臨済宗の僧で、円覚寺、建長寺で管長を務めます。万国宗教大会出席を機に、初めて欧米に禅を紹介しました。夏目漱石、徳富蘇峰ら著名人が釈宗演のもとで参禅し、禅ブームをおこしたと言われています。楚人冠に居士号「無懐居士」を授けた人物です。



釈宗演

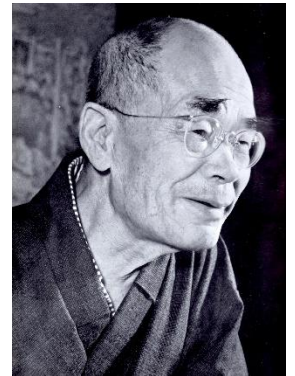
○釈宗演が結ぶ縁

安政6（1859）年生まれ、11歳のとき臨済宗妙心寺で出家しますが、出家の理由は分かっていません。

とても優秀な方だったようで、26歳で鎌倉円覚寺に付属するお寺の住職となります。普通のお坊さんなら、このまま修行を続けますが、英語も勉強するために慶應義塾に入学しました。慶應義塾では、英語の先生として赴任していた宣教師クレイ・マッコレーイとの出会いがあります。当時、英語の教師は宣教師が担うことが多かったようで、仏教を学んだ人物がキリスト教の精神も学ぶこととなります。クレイ・マッコレーイは日本ユニテリアン教会の責任者で、自由神学校（のちの先進学院）の責任者でもありました。楚人冠に宗教哲学を教え、常に目をかけ、楚人冠を米国公使館の通訳に推薦した人物です。釈宗演がクレイ・

マッコレーイと会ったのは、楚人冠が自由神学校に入る前ですが、交友関係がつながっていることがわかります。

また、この時代、江戸幕府から明治政府に政治が変わったように、世の中の変化は仏教界にも影響を及ぼし、仏教を存続するための変革を迫られました。活動の場所や方法は異なるものの、釈宗演、楚人冠も新たな仏教の形を目指しています。釈宗演は、禅の門戸を出家していない信者（居士）の参禅を積極的に受け入れました。仏教改革を目指す仲間誘われ、楚人冠が参禅するのもその流れです。そして、円覚寺で鈴木大拙と出会います。鈴木大拙は仏教、特に禅思想を欧米に紹介した人物で、この出会い以降楚人冠が没するまで親交を結びました。



鈴木大拙

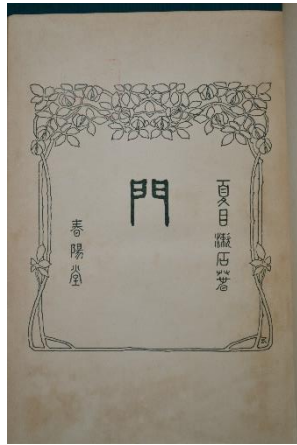
余談ですが、この仏教改革を目指した青年グループのなかに高楠順次郎という人物がいました。『反省会雑誌』（のち『中央公論』）を刊行した反省会の仲間です。高楠は、のちに仏教学者となり、一方で日本橋簡易商業夜学校（⇒中央商業学校）を興します。これは現在の中央学院大学です。高楠が作った学校が我孫子に来るとは、この数奇な縁は楚人冠達も想像できなかったと思います。

釈宗演の人生を追うだけでも、楚人冠の人生にも影響を与えた人物が名を連ねていることがわかります。今回の展示では、楚人冠邸に眠る資料を紐解いて、禅、釈宗演、楚人冠を繋ぐ交友関係と数奇な運命を見ていきます。

○夏目漱石『門』

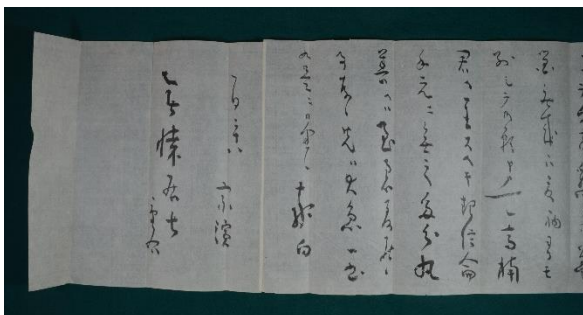
小説家の夏目漱石は、東京帝国大学（現：東京大学）で教鞭を執っていた頃から「吾輩は猫である」「坊っちゃん」などを発表して文名を高め、

東京朝日新聞社に入社して以後、数々の小説を朝日新聞紙上に連載しました。入社以来、楚人冠とは漱石が出社するたびに昼食を共にする仲でした。東京朝日新聞で明治 43 (1910)年 3月 1日から連載が開始された「門」という小説の中で、主人公宗助の参禅の場面には、明治 27 (1894)年に漱石が参禅した経験が反映されています。そして、楚人冠も『へちまのかは』（『楚人冠全集』第一巻）の「雲水行住」で座禅の様子を描いています。楚人冠の「雲水行住」は、明治 42年 9月の作品です。読み比べると、小説家と随筆家で書き方の立ち位置、物事の受け取り方が違い、同一人物に参禅したのに、ずいぶん印象が違います。一人はシリアスに、一人はコミカルに描いています。漱石の参禅は明治 27 (1894)年 12月、楚人冠の参禅は翌 28年 6月、円覚寺では半年差で出会わなかった二人ですが、親しくなってから禅について会話を交わすこともあったかもしれません。



○釈宗演から楚人冠への手紙

明治 31 (1898)年 釈宗演から楚人冠に手紙が来て、友人として土屋元作を紹介してくれました。土屋も釈宗演のもとに参禅した一人です。こうして釈宗演が土屋と楚人冠を結び付けたことが、のちに思わぬ成果を生みます。



それは、大きな反響を呼んだ参加者公募の世界一周旅行「朝日世界一周会」です。この旅行を計画し引率したのは楚人冠と土屋の二人でした。

世界一周会の実現につながる土屋との縁は、1893年にさかのぼります。この年、釈宗演は彼のもとに参禅していた野村洋三という人物を通

訳として伴い、1893年にシカゴで開催された万国宗教会議に参加しました。当時の万博では各国の産物の売り込みが行われます。そこに商工業者として参加しており、宗演・野村と偶然再会したのが土屋でした。こういった渡米経験を持つ土屋が参加者公募のヨーロッパ旅行を計画していた楚人冠に、それならアメリカも、と提案してでき上がったのが、世界一周会の企画だったのです。



世界一周会の参加者

後列左端 土屋 右から二人目 楚人冠

この出会いが世界一周会につながるもう一つのエピソードが、「ただ一人夫の同伴なく参加した女性」です。この女性は野村みちという、横浜で外国人向けの骨とう品店を営んでいた人物です。野村みちは、実はシカゴで宗演とともに土屋と旧交を温めた野村洋三の妻です。世界一周会の参加者にも、禅が結んだ縁が生きていたのです。ちなみに、野村夫妻は関東大震災で骨とう品店を閉めた後は、横浜の震災復興に貢献し、ホテルニューグランドの経営を長く行いました。

禅という経験が、人やその後の人生を広げ豊かにしていることがわかる展示となっています。その他の「縁」は杉村楚人冠記念館でご覧ください！

事務局より

11月3日よりガイド活動が再開しました。ご都合をつけていただき、ありがとうございます。

再開して、皆さまから色々アドバイスをいただいていますので、少しずつ改善していければと思っています。よろしくお願い申し上げます。

再開とともに散策の秋になっています。11月17日～21日まで JR のイベント駅からハイキングも行われ、ご来館数が多かったようです。

次回の月例会は12月2日(木)午前9時30分から教育委員会大会議室で開催の予定です。